

## 薩 摩 辞 書

教育学部助教授

竹 中 龍 範

明治改元の明くる年、明治2(1869)年の正月に一冊の英和辞典が刊行された。世に言う「薩摩辞書」である。明治4年には早くも改訂版が出され、世の需要に応えた。この薩摩辞書刊行の経緯については本『としょかんだより』No. 24に『英和對譯袖珍辞書』を紹介した際、その最後に簡単に触れた。今回はこの薩摩辞書を取り上げる。

明治2年の薩摩辞書初版は、正式書名を『和譯英辞書』という。巻頭写真に掲げたように、和文扉と英文扉とをもち、後者に‘THIRD EDITION REVISED’とあるのは、本書が文久2(1862)年の『英和對譯袖珍辞書』、慶応2(1866)年の『改正増補英和對譯袖珍辞書』の改訂版であるとの意による。和文扉にはこのことは明記されていないが、序文は「改正増補和譯英辞書序」と題され、このことを示している。序文は和文・英文の両様で記され、本書刊行の目的と経緯とを明らかにしているのので、ここに引いておきたい。

## 改正増補和譯英辞書序

[擡頭]皇國ニ英學ノ行ハルハ他ニ非ラス所謂彼ノ長ヲ取り我ノ短ヲ補ハシカ爲ナリ其長ヲ取り短ヲ補ウハ 皇化ヲ萬國ニ輝カサシカ爲ナリサレハ其行ハルハ其意ヲ詳ニシ其解ヲ精シクセテハ得アランコトナリ今書ヲ作ルモ皆此コヽロニ依ラサルハナシコレヨリ先ニ堀先生英ノ字典ヲ譯スルニ我 [擡頭]皇國ノ語ヲ以テシテ此學ニ志スル者ノ羽翼トセリシカレトモ往々謬語欠字等アリテ且遺漏ナキニシモ非スサルヲ堀越先生其謬誤ヲ改メ畧語ヲ加ヘタリハシメニ比スレハイトヨロシクハナリタレト學者ノ輩ニハ猶アカヌ所アルヲ以テコノタビアメリカ教師等ニ倚リ更ニ改メ正シ今世不用ノ英語ヲ省キ必用ノ文字ヲ補ヒ加ヘ且口調ヲ誤ランカ爲吾片假名ヲホトリニ屬ケ又吾漢字ニモ施シテ童蒙ニ便宜ヲ得セシメサテコノ書ノ要トスルモノハ徒ニ英文ノ解譯ト我通辭ニ利アルノミニ非ラス當時要用ノ語ヲ増加シタレハ頗ル學者ノ遺

漏ヲマ減スト爾云

日本

明治二歳己巳正月

薩摩學生

英文序は上記の和文序を訳し、最後に本書の出版社‘American Presbyterian Mission Press’及びその責任者 Mr. Gamble に謝辞を述べ、この英文序の修正が彼の手によっていることを謝している。そして、「薩摩學生」にあたるところは‘A STUDENT OF SATSUMA’としている。ただし、この薩摩辞書にかかわった薩摩學生とは、前田正毅、高橋良昭ならびに前田正名の3名であり、単数形にしているのは意図的なものか、あるいは単なる誤りなのか明らかにされていないが、事実にはそぐわない。

ここで、この薩摩辞書刊行の背景について少しく触れておく。

幕末に刊行された『英和對譯袖珍辞書』が改正増補版を出してもなお需要に応えきれず、出版定価をはるかに超えて取り引きされたことは前稿に記したとおりである。これに目をつけたのがこの薩摩藩の學生たちであった。同藩の英学者高橋良頭の子、高橋良昭は海外留学の夢をいだき、その資を得るためにこの「對譯袖珍」を翻刻する話を、同じく留学の機会をねらっていた前田正毅に持ちかけた。のちには正毅の弟、前田正名も加わり、3名によってこの企てが進められた。翻刻とは言いながら、幕府や原本「對譯袖珍」の出版元である開成所の許可を得ない海賊版である。しかし、ただの海賊版ではなく、改正増補を施し、「對譯袖珍」になかった発音表記を仮名によって与えるという作業を加えることとし、当時長崎に在留していた G. H. F. Verbeck に相談をもちかけて、その教えを受けることができた。この Verbeck はオランダ生まれのアメリカ人宣教師で、安政6(1859)年来崎、維新後は大学南校頭取、また政府顧問となった人物で、フルベッキと呼ばれた。このフルベッキの斡旋で、印刷は上海にあ

ったアメリカ長老派教会系の出版社、美華書院（英語名は既述）に依頼することとなった。美華書院はすでに慶応3（1867）年、ヘボンの『和英語林集成』を出版しており、薩摩辞書の装本もこれにならって洋紙洋装の活版印刷となった。背革には‘ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY’と刻され、明治2年の正月に刊行された。出版部数は1,500部とされている。

こうして出版された薩摩辞書初版の構成は、和文扉、英文扉に続いて和文序・英文序が各1ページ置かれ、その後に本文677ページ、「不規則動辭表」9ページ、略語一覧10ページ、「象形記號之解」3ページが続いている。英語の見出しには発音表記が片仮名のルビで示され、訳語の漢字にもルビが振られている。いずれも初学者に益するところ大であつたろうと推測される。

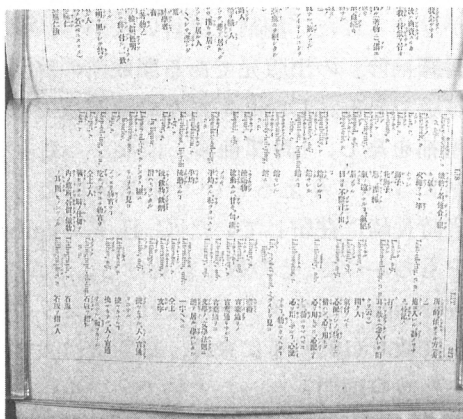
さらに2年後、明治4年にはこの初版が改訂されて、同じく上海の美華書院から『大正増補和譯英辭林』と題して出版された。初版とほぼ同様の装本で、縦が1 cm ばかり短くなり、背革・角革および平の色が変わったくらいである。背の書名は‘ENGLISH & JAPANESE PRONOUNCING DICTIONARY’と改められ、英文の扉にも‘PRONOUNCING’の語が加えられた。内容構成は、和文扉、英文扉、和文序（1p.）、音調基表（2pp.）、略語之解（1p.）、本文（764pp.）、「不規則動辭表」（10pp.）、「略語解」（18pp.）、「象形記號之解」（4pp.）、「各國貨幣度量表」（10pp.）となり、総ページ数で100ページばかり増えている。後付け付録の充実もさることながら、「序」に「ウエブストル氏ノ辭書ヨリ緊要ナル者凡ソ八千餘語ヲ拔萃ス」とある通り、本文収録語数の増補が施されている。さらに、‘PRONOUNCING’と謳った所以は、同じく「序」に「前本ニハ英語ノ傍ニ片假名ヲ以テロ調ヲ施スト

雖モ音聲ノ高下及ヒ字綴ヲ明辨スル能ハス故ニ今片假名ヲ省キウエブストル氏ノ辭書ニ據テ是ニ易ルニ音符（エセト）並ニ字綴（シル）ヲ以テス」とある如く、初版に施した音声表記のための片仮名によるルビを廃し、見出し語のアルファベット文字の上下に‘-、~、..、^、~’などの記号を付加するウェブスター式表記によったことを示している。これは当時、英語学習の入門期用教科書として盛んに用いられたウェブスターのスペリング・ブックに親しんだ学習者には馴染みのある発音表記であった。

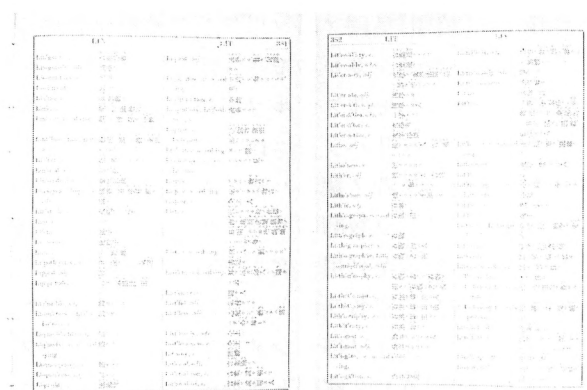
こうして、「對譯袖珍」の海賊版ながらも、初学者への配慮を盛り込んだ薩摩辞書は、短時日のうちに改訂を加え、初版、再版ともに目を見張る売れ行きを示した。和紙袋綴じの和書漢籍が主流の当時の出版界にあつて、角背革の洋紙洋装による最新の装丁も歓迎された。明治4年の薩摩辞書再版は、翌明治5年には北海道開拓使仮学校の御用辞書として、かぶせ彫りによって「對譯袖珍」と同様の装本に仕立てられ、荒井郁編『英和對譯辭書』として翻刻された。さらに、明治20年頃には十指に余る出版社より翻刻本が出され、明治中期まで、柴田昌吉・子安峻『附音挿圖 英和字彙』（日就社〔読売新聞社の前身〕、明治6年）と勢力を二分する形で英和辭書界に君臨した。

ここで、その内容の一端を窺う資料として、『としょかんだより』No. 24に掲出した「對譯袖珍」の本文に該当する部分を薩摩辞書初版、同再版よりとって、写真によって示したので比較していただきたい。なお、初版については‘Lithography, s.’が次のページにあるので‘Lithographer, s.’までとなり、再版については比較の都合上、381ページと382ページとを示した。

この‘Liquid, adj. ~ Lithography, s.’の範囲で、「對譯袖珍」慶応2年版、「薩摩辞書」初版、同再



「薩摩辞書」初版327ページ



「薩摩辞書」再版381-382ページ

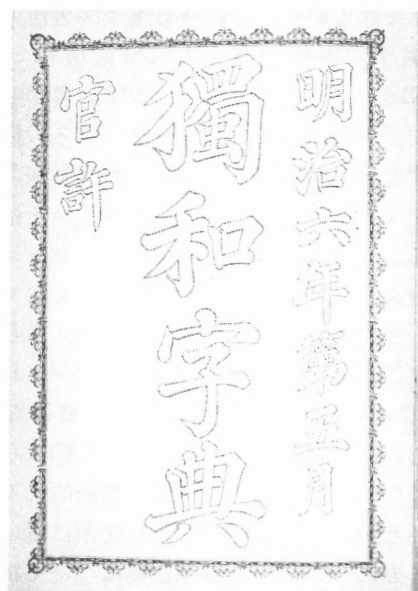
版の異同を比べてみると次のような点が明らかになる。

まず、薩摩辞書初版において増補された見出し語は‘Listful, *adj.* [マ, 再版では *adj.* と訂正] 氣付クベキ’, ‘Literatim, *adv.* 一字、ニ’の2語である。再版での増補は‘Literalism, *s.* 言葉ヲ説キ明ス’, ‘Literalist, *s.* 言葉ヲ説キ明ス人’, ‘Literate, *adj.* 博學ナル人’, ‘Lithesome, *adj.* 撓ヤカナル。柔順ナル’, ‘Lithic, *adj.* 石淋ノ’, ‘Lithographic, Lithographical, *adj.* 石版ニ書ク術ノ’の6語である。一方、初版で削除されたのは‘Literati’の1語、再版では‘Listed’, ‘Lit’, ‘Litharge’の3語である。特に‘Litharge’ (「酸化鉛」) は「對譯袖珍」, 薩摩辞書初版ともに不明のまま空欄の形で引きずったもので、再版では削除という形での処理をされたことになる。他にも訳語の修正、追加などが行われているが、新たな問題を生じたところも見られる。薩摩辞書初版では‘Literati, *s. pl.* 孝者’を削除し、‘Literatim, *s.* 一字、ニ’を挿入したが、後の‘Literator’を元のままに残したために、その訳語「全上」が意味的には「孝者」ではなく「一字、ニ」を受けてしまうというチグハグが生じた。もっとも、再版の方ではこれを「文學家」と訂正している。



『英和對譯辭書』扉

このように、「對譯袖珍」から薩摩辞書初版・再版、さらに『英和對譯辭書』と続く英和辞典の系譜は神原文庫所蔵本によってたどることができる。ただし、薩摩辞書再版については、残念ながら神原文庫に蔵されているのは「官許」と銘打った明治4年版ではなく、明治18年の文學社版ならびに明治19年の大東館版である。また、独和辞典にも薩摩辞書と呼ばれるものがあり、明治6年5月刊行の『獨和字典』がそれである。この出版も上海、美華書院であるが、その和文序は「薩摩學生 松田爲常 瀬之口 隆敬 村松經春」と結ばれ、独文序の方には‘Der Schüler von Satzma’ と記されている。これも神原文庫に収められている。英和、独和とくると仏和辞典はどうかということになるが、明治4年、やはり上海の美華書院出版にかかる『佛和辞典』があるものの、こちらは「好樹堂訳」となっていて、長崎の人、岡田好樹の手になるものである。これも神原文庫に所蔵されているので、美華書院の出版物に関心のある向きには参考になるであろう。



『獨和字典』和文扉